

大学生の環境に対する実践行動に関する一考察（Ⅱ）

今 井 清 一

1. はじめに

本稿では、①大学生がどのような環境問題を重要だと考えているか、②どのような商品を必要だと考えているか、③環境に配慮した行動をどの程度とることができると考えているか、また、食品の安全性について、④食品を購入する際、何にもっとも関心を払っているか、⑤食品添加物に対してどの程度知っているか、⑥環境問題をどうすれば解決できると考えているか、⑦子どもの時、生物とどのように関わり、遊び、どのような自然体験をしているかについてアンケート調査によって把握する。

そうすることによって、大学生に対する適切な環境問題教育と環境教育の内容を検討し、環境問題の気づきだけに終わるのではなく、それをスムーズに実践に結びつけるかについても考察したい。

2. 調査方法

アンケート調査は、兵庫県内のA女子大学の「環境教育論」（2003年度後期開講）1・2年履修者128名に対して行ない、有効回答数は124名であった。調査時期は平成15年10月7日（火）、最初の講義時間である。アンケート方法は、後述するような質問内容に対する、選択肢による質問紙法とした。

本学教授

3. 調査結果と考察

(A) 重要だと考えている環境問題

質問(4) 下の環境問題の中で、今あなたがもっとも重要だと考えているものを、3つ選んで、番号に○をつけて下さい。

「重要であると考えている」順番は、1位⑪地球温暖化（88人、71.0%）、2位⑤オゾン層の破壊（54人、43.5%）、3位⑩森林破壊（49人、39.5%）、4位④ゴミ問題（48人、38.7%）5位①大気汚染（37人、29.8%）、6位③水質汚染（34人、27.4%）、7位⑧環境ホルモン（33人、26.6%）であり、①⑤⑩のような地球環境の問題から④①③などの身近な環境問題にまで及んでいる。

他方、⑨土壌汚染（2人、1.6%）、②酸性雨、⑦騒音問題（それぞれ9人、7.3%）などは重要だとは考えていない。大都市では上位にくると思われる騒音問題がほとんど問題にされていないのは、多くの学生が閑静なところに住んでいるからであろうか。（表1）（図1）。

表1 重要だと思われる環境問題

	質問事項	○人数	%
①	大気汚染	37	29.8
②	酸性雨	9	7.3
③	水質汚染	34	27.4
④	ゴミ問題	48	38.7
⑤	オゾン層の破壊	54	43.5
⑥	食品添加物	19	15.3
⑦	騒音問題	9	7.3
⑧	環境ホルモン	33	26.6
⑨	土壌汚染	2	1.6
⑩	森林破壊	49	39.5
⑪	地球の温暖化	88	71.0

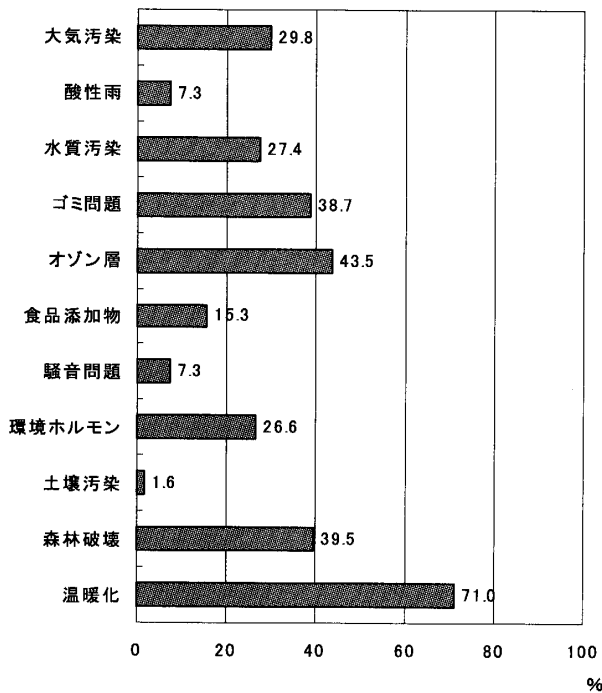


図1 重要だと思われる環境問題

(B) 身近かな物への必要度調査

私どもは便利で快適な生活を送るために、いろいろな物を使用している。しかし、すべてが生活必需品であるとは限らない。生活要望品（あった方が望ましい品物）、とくに必要ではないものまでさまざまである。そこで、できるだけ身近なつぎのような19品目に関する必要度意識調査を行なった。

生活必需品として、上位3位を占めたのは、冷蔵庫（113人、91.1%）、洗濯機（76人、61.3%）、ティッシュ（65人、52.4%）である。冷蔵庫、洗濯機は当然のことながら、ティッシュの必要度が非常に高く、使い捨てのライフスタイルを象徴している。

他方、野菜のトレー（1人）、ファクス、デジカメ（それぞれ3人）はとくに必要ではないと考えている。携帯電話がファクスやデジカメの役目を兼ねているためであろうか。また、スーパーの袋、缶ジュース、マンガ雑誌、自動販売機も、生活必需品と考えている学生は非常に少ない。缶ジュースや自動販売機は、無ければ無くて済むものであることを示しているように思われる。コンピュータがあまり必要ではないと考えている学生

生活する上でどうしても必要だと思う物には ○
 なくても生活することができると思う物には △
 特に必要ではないと思う物には ×

をそれぞれ（ ）の中に記入して下さい

物品名	回答
1. 冷蔵庫	()
2. 電子レンジ	()
3. 洗濯機	()
4. エアコン	()
5. コンピュータ	()
6. ファクス	()
7. テレビ	()
8. 野菜のトレー	()
9. スーパーの袋	()
10. 缶ジュース	()
11. マンガ雑誌	()
12. 新聞	()
13. ティッシュ	()
14. 携帯電話	()
15. コンビニ	()
16. 自家用車	()
17. 自動販売機	()
18. 自転車	()
19. デジカメ	()

が多いのは、まだまだ高価であること、これが使えない、苦手であることと関係があるのかもしれない。(図2)

冷蔵庫については「生活必需品」、「生活要望品」両方を合わせると99.2%を占め、とくに必要ではないと考えている学生は、0.8%にすぎない。洗濯機、ティッシュについても同様で、あって当然という状況である。

つぎに、必要度と実践可能度との関係について検討する。つまり、対象となる製品をいざとなれば、使わずに辛抱できる人とそうでない人では、その製品に対する必要度の意識が異なると考えられるからである。

調査結果によれば、テレビ、ティッシュ、携帯電話の必要度と使うことを減らすのを実行できることはだいたい一致しており、これ以上の使用減は期待できないように思われる。スーパーの袋については、必要度の数値が小さい以上に、もら

大学生の環境に対する実践行動に関する一考察（Ⅱ）

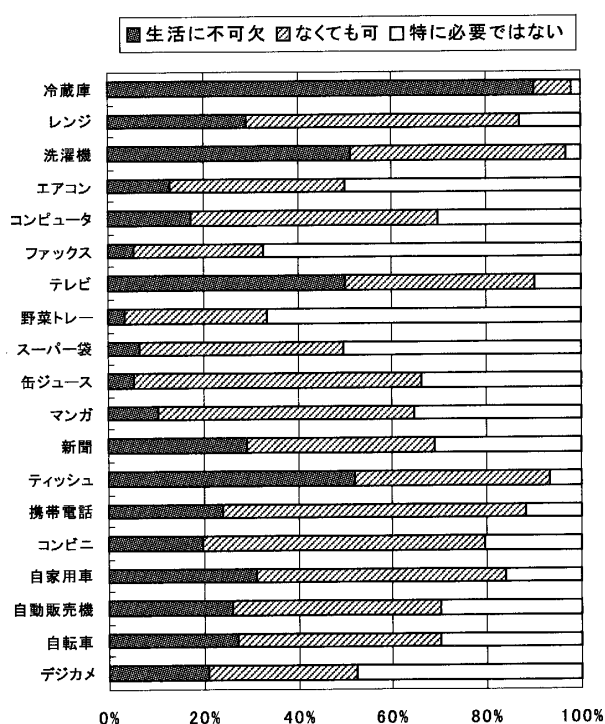


図2 必要度意識

わないの数値が大きい。缶ジュースは今まで以上になくてもすみそうである（ペットボトル入りの飲料を選んでいるかもしれないので、今後調査項目に加えることが必要かもしれない）。ただ、冷暖房については、当たり前のことになっているためか、実行しにくいようである。

(C) 実践可能度調査

つぎにあげることが環境のためになるとわかれば、あなたは実行できますか。(該当する記号に○)
 {ア. 実行できる イ. 時々ならできる ウ. できない}

- ① 缶入りジュースを飲むのを減らす
- ② テレビやファミコンをする時間を減らす
- ③ 冷暖房をひかえる
- ④ 水のむだな使用を減らす
- ⑤ ティッシュペーパーの使用を減らす
- ⑥ 家庭でも燃えるゴミと燃えないゴミを分けてゴミ箱に入れる
- ⑦ シャンプーやリンスに使う1回の量を減らす
- ⑧ スーパー等でビニールの袋をもらわず自分で用意した入れ物に入れる
- ⑨ リサイクル可能な物はリサイクルに出す

- ⑩ エコマーク付きの商品を買う
- ⑪ 出かけるとき、なるべく自動車を使わない
- ⑫ 発泡スチロールやラップで包装された物は買わないようにする
- ⑬ 低・無農薬野菜や無添加の食品を買う
- ⑭ ゴミが多く出るファーストフード店にいく回数を減らす
- ⑮ 携帯電話はできるだけ使わないようにする

①缶入りジュースを飲むのを減らすは（110人、88.7%）、また、⑥家庭でのゴミの分別は（96人、77.4%）を示し、この2つに関しては、実行の可能性が大きい。反対に、⑮携帯電話を使用しない（21人、16.9%）は、16.9%にすぎず、普及してしまった携帯電話の利用減は期待できそうにない。その他、⑫発泡スチロールやラップで包装された物は買わないようにするは、28人、22.6%、また、⑩エコマーク付きの商品を買うは、31人、25.0%と、実行できないとする学生が⑫では4分の1強にとどまり、エコマーク付きの商品の購入についても、実行できるものは4分の1にすぎず、エコマークの意味がわからないのか、何も考えずに買うのか、買ってきたのがたまたまエコマーク付き商品であるのかだと考えられる。（表3）（図3）。

表3 生活の中での実践可能度

事項	ア 人数 (%)	イ 人数 (%)	ウ 人数 (%)
①	110(88.7)	15(11.3)	0
②	55(44.4)	41(33.9)	4(3.2)
③	73(58.9)	50(40.3)	1(0.8)
④	70(56.5)	50(40.3)	4(3.2)
⑤	56(45.2)	56(45.2)	12(9.6)
⑥	96(77.4)	23(18.5)	5(4.1)
⑦	63(50.8)	47(37.9)	14(11.3)
⑧	78(62.9)	44(35.5)	2(1.6)
⑨	76(61.3)	47(37.9)	1(0.8)
⑩	31(25.0)	81(65.3)	12(9.7)
⑪	54(43.5)	53(42.7)	17(13.8)
⑫	28(22.6)	69(55.6)	27(21.8)
⑬	48(38.7)	66(53.2)	10(8.1)
⑭	68(54.8)	54(43.5)	2(1.7)
⑮	21(16.9)	65(52.4)	38(30.7)

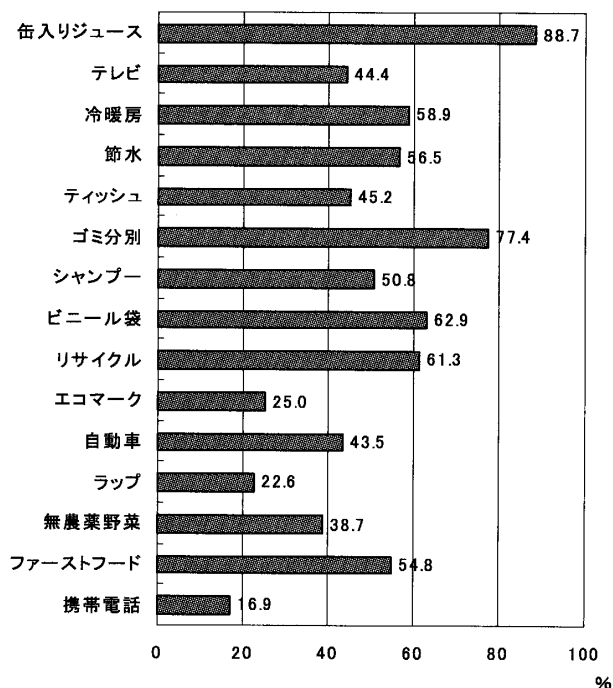


図3 実践可能度

③冷暖房をひかえる, ⑨リサイクル可能なものはリサイクルにだす, ⑧スーパー等でビニ袋はもらわない, ⑭ゴミが多くでるファーストフード店に行く回数を減らす, ②テレビやファミコンをする時間を減らす, ④水のむだな使用を減らす, ことを実行できない学生は1~4人と皆無に近いが, 少なくとも, 時々なら実行できることを示している。

D) 食の安全性

(1) 食品を購入する時, 食品の成分についての表示をみますか。(番号に○)

- ①必ず見る ②時々見る ③見ない

①14人, 11.3%。②84人, 70.2%, ③23人, 18.5%で, 必ずみるは10%強にすぎず, ほとんど表示をみることなく, 購入していることを示している。

(2) 食品の安全性について, もっとも心配していることは何ですか。1つ選んで○をつけて下さい。

1. 残留農薬 2. 遺伝子組み換え食品 3. 容器や包装などの成分の溶けだし 4. 細菌による食中毒
 5. 食品添加物 6. 残留抗生物質 7. 異物の混入 8. 食肉の細菌汚染(狂牛病など)
 9. 寄生虫 10. その他 11. 特に心配していない

もっとも心配している順は, 1位食中毒(27人, 21.8%), 2位食品添加物(24人, 19.4%), 3位残留農薬(17人, 13.7%)となっているが, 1位, 2位でも20%前後で突出して心配しているわけではない。残留抗生物質や寄生虫に対しては, ほとんど心配していないが, とくに心配していない学生も6.5%とわずかではあるが, 存在する。

(3) ふだん食品を購入する時, 重視することを1つ選んで○をつけて下さい。

1. 値段 2. 賞味期限 3. 製造会社名
 4. 味・おいしさ 5. 栄養剤が使用されているかどうか 6. 見た目(色や形, 鮮度) 7. 食品添加物の有無
 8. 国産品か輸入品か 9. 新商品 10. その他()

重視する順は, 値段, 賞味期限, 味・おいしさ, 国産品か輸入品かの順となっている。とくに1位の値段は, 41人, 33.1%と3分の1の学生がこだわっており, 賞味期限も25人, 20.2%と5分の1の学生が注意している。製造会社や新商品, 栄養剤の利用・未利用に関しては気にしない学生が圧倒的に多いことを示している。(図4)

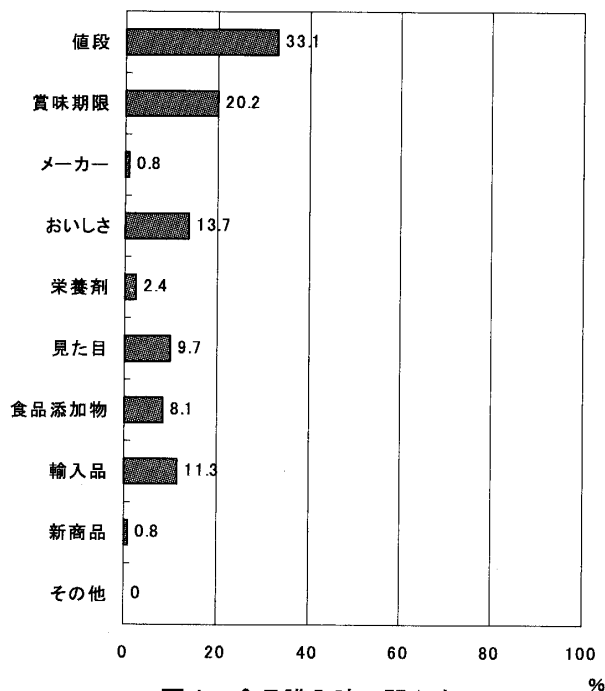


図4 食品購入時の関心度

大学生の環境に対する実践行動に関する一考察（Ⅱ）

(4) 食品添加物として使用されているもののうち、知っているものすべてに○をつけて下さい。

1. 甘味料（サッカリンなど） 2. かんすい
 3. 乳化剤 4. 膨張剤 5. 発色剤 6. イーストフード 7. 酸化防止剤 8. 香料 9. 着色料 10. ガムベース 11. 酸味料 12. 増粘剤 13. 殺菌剤 14. 防カビ剤 15. 漂白剤

これは、食品添加物をどの程度知っているかを知るための質問である。着色料と香料については、ほとんどの学生が知っていることを示している。とくにほとんどの着色料には発ガン性があることも同時に知っているのであれば、幸いである。他方、かんすいやガムベースについて、知っている学生は少ない。（図5）

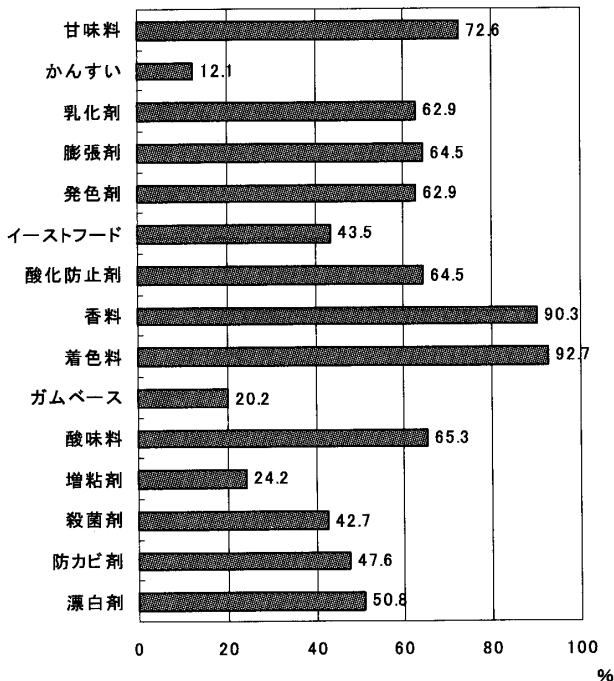


図5 食品添加物の知識

(E) 問題の解決

環境問題を解決するためには何がもっとも必要だと思いますか。下からよいと思うものを2つ選び、記号に○をつけて下さい。

- ア. 環境問題に関する自覚、意識を変える
 イ. 環境問題に関する知識、理解を深める
 ウ. 生活を簡素にする
 エ. 環境問題を解決するため、努力し実行する
 オ. 経済構造を変え、企業活動に対する規制を強める

- カ. 行政の姿勢を変え、政治を変える
 キ. 環境問題を考えた開発を行う
 ク. 資源の無駄遣いをやめる
 ケ. リサイクル
 コ. 住民運動
 サ. 行政と住民とが協力する
 シ. 国際的な協力
 ス. 人口を減らす

「環境問題に関する自覚、意識を変える」（48人、38.7%）、「リサイクル」（42人、33.9%）、「環境問題に関する知識、理解を深める」（36人、29.0%）が3分の1強または、約3分の1を占め、「環境問題を解決するため、努力し、実行する」（32人、25.8%）、「資源の無駄遣いをやめる」（29人、23.4%）が4分の1を占めるなど、個人レベルの意識や態度の変革、実行が環境問題を解決するためのカギであると考えている。

一方、「生活を簡素にする」（6人、4.8%）ことには消極的であり、「経済構造を変え、企業活動に対する規制を強める」（5人、4.0%）、「行政の姿勢を変え、政治を変える」（4人、3.2%）など行政の姿勢や政治・経済のあり方に注目している学生も少ない。かつての住民運動の役割を理解している学生はまったくない。（表4）（図6）

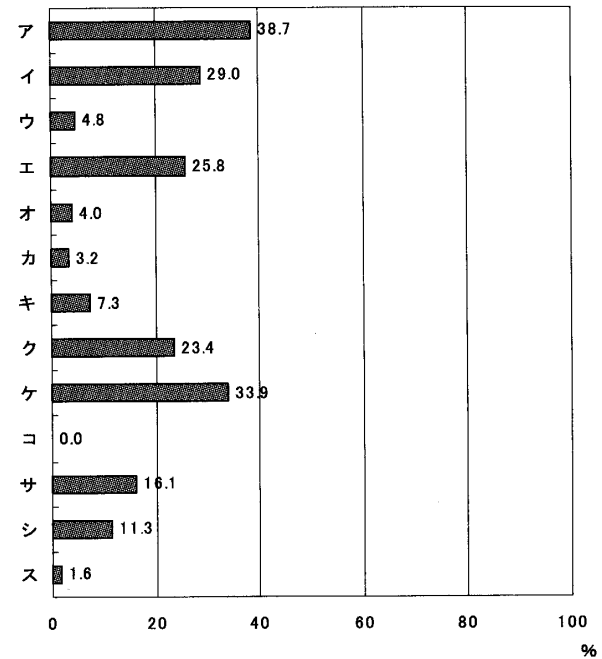


図6 環境問題の解決

幼児期を含めこれまでに経験したと考えられる、もっとも身近な環境調査である。(ある・ない)のいずれかに○をつけて下さい。

(1) 生物とのかかわり

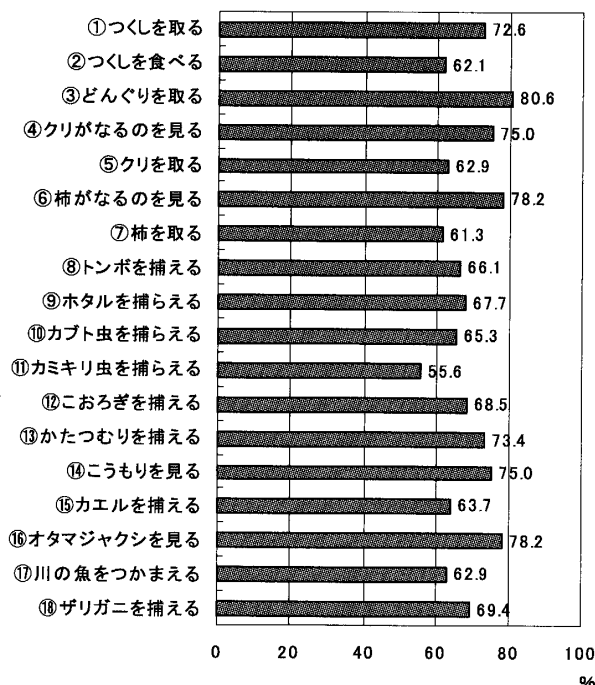
- ①つくしをとったことがある。
- ②つくしを食べたことがある。
- ③どんぐりをとったことがある。
- ④クリがなっているのを見たことがある。
- ⑤クリを木からとったことがある。
- ⑥柿がなっているのを見たことがある。
- ⑦柿を木からとったことがある。
- ⑧トンボをつかまえたことがある。
- ⑨ホタルを見たり、つかまえたりしたことがある。
- ⑩カブト虫やクワガタ虫を木からつかまえたことがある。
- ⑪カミキリ虫をつかまえたことがある。
- ⑫こおろぎをつかまえたことがある。
- ⑬かたつむりをつかまえたことがある。
- ⑭こうもりを見たことがある。
- ⑮カエルをつかまえたことがある。
- ⑯オタマジャクシを見たことがある。
- ⑰川や池の魚をつかまえたことがある。
- ⑱ザリガニをつかまえたことがある。

表 7-1 幼児期の生物とのかかわり

	はい 人数 (%)	いいえ 人数 (%)
①	90(72.6)	34(27.4)
②	77(62.1)	47(37.9)
③	100(80.6)	24(19.4)
④	93(75.0)	31(25.0)
⑤	78(62.9)	46(37.1)
⑥	97(78.2)	27(21.8)
⑦	76(61.3)	48(38.7)
⑧	82(66.1)	42(33.9)
⑨	84(67.7)	40(32.3)
⑩	81(65.3)	43(34.7)
⑪	69(55.6)	55(44.7)
⑫	85(68.5)	39(31.5)
⑬	91(73.4)	33(26.6)
⑭	93(75.0)	31(25.0)
⑮	79(63.7)	45(36.3)
⑯	97(78.2)	27(21.8)
⑰	78(62.9)	46(37.1)
⑱	86(69.4)	38(30.6)

(2) 子どもの時の遊び

- ①かんけりをして遊んだことがある。
- ②竹とんぼで遊んだことがある。
- ③魚つりをしたことがある。
- ④紙飛行機を作って遊んだことがある。
- ⑤プラモデルを作って遊んだことがある。
- ⑥自分より上の学年の子と遊んだことがある。
- ⑦自分より下の学年の子と遊んだことがある。
- ⑧10人以上でソフトとかドッジボールなどをして遊んだことがある。



(表 7-1) (図 7-1), (表 7-2) (図 7-2)

図 7-1 幼児期の生物とのかかわり

表 7-2 幼児期の遊び

	はい 人数 (%)	いいえ 人数 (%)
①	103(83.1)	21(16.9)
②	111(89.5)	13(10.5)
③	102(82.3)	22(17.7)
④	122(98.4)	2(1.6)
⑤	63(50.8)	61(49.2)
⑥	118(95.2)	6(4.8)
⑦	120(96.8)	4(3.2)
⑧	120(96.8)	4(3.2)

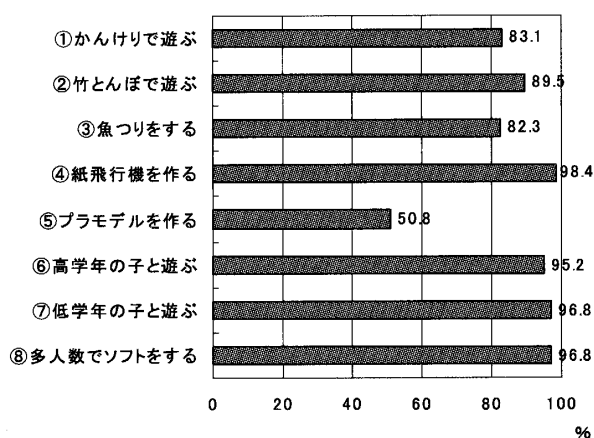


図 7-2 幼児期の遊び

トとかドッジボールをして遊んだことがあると答えており、上級生や下級生との交流があったことを示している。

(3)の子どもの時の自然体験では、大部分の学生が草の上にねころんだり、花の蜜を吸ったり、四つ葉のクローバーをさがしたりした経験をしている。しかし、(大人と)山の中を歩いたことのある学生が96.8%を占めているが、木の実を食べたことのない学生が多く3分の1を占めており、危険なことはなるべく避けるという自然体験であると思えるのは残念である。(表 7-3) (図 7-3)

表 7-3 幼児期の自然体験

	はい 人数 (%)	いいえ 人数 (%)
①	85(68.5)	39(31.5)
②	117(93.6)	7(6.4)
③	119(96.0)	5(4.0)
④	116(93.5)	8(6.5)
⑤	102(82.3)	22(17.7)
⑥	95(76.6)	29(23.4)
⑦	98(79.0)	26(21.0)
⑧	120(96.8)	4(3.2)
⑨	104(83.9)	20(16.1)
⑩	93(75.0)	31(25.0)

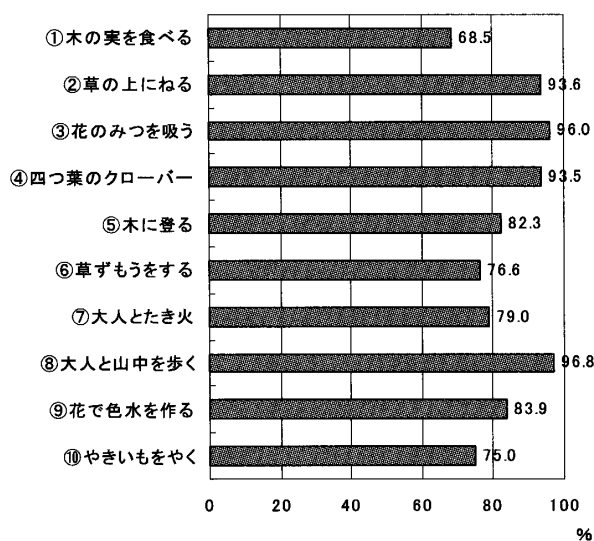


図 7-3 幼児期の自然体験

(3) 子どもの時の自然体験

- ①木の実を食べたことがある。
食べたことのある人は、木の実の名前 ()
- ②草の上にねころんだことがある。
③花のみつを吸ったことがある。
④四つ葉のクローバーをさがしたことがある。
⑤木に登ったことがある。
⑥草相撲をしたことがある。
⑦(大人の人と)たき火をしたことがある。
⑧(大人の人と)山の中を歩いたことがある。
⑨花で色水を作ったことがある。
⑩家の外でやきいもをやいたことがある。

(1)に関しては、60%以上の学生がほとんどのことを経験していることを示している。

(2)の子どもの時の遊びに関しては、プラモデルを作って遊んだことのない学生が半数を占めているのが特徴である。ほとんどの学生が上級生とも下級生ともいっしょに遊んだり、10人以上でソフ

4. 結 び

本稿は、前回の調査（平成10年10月6日）から丁度5年後の平成15年10月7日に行なったアンケート調査をもとに、考察したものである。学生は前回と同じでないことはもちろんである。

今回の結果は前回の結果と比較して、ほとんど大差はないように思われる。前回にも記した通り、環境問題に対する意識が高い割には必ずしも生活の中での実践行動が伴っていない。事実が大人

にも子どもにも伝えられていない。家庭・学校・地域での環境教育が十分に行なわれていないことも大いに関係していると思われる。「総合的な学習の時間」が積極的に活用されることを期待したい。「気づきから行動へ」、何でもよい、難しく考えず、自分にできることから始めればよいのではないか。

（前回の調査結果については、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科『研究誌』第5号を参照されたい）。